

随想

円の実力について

日経新聞の一月二十日第一面のコラムに『円の実力低下、五〇年前並み』とあった。昨日、円の実力低下が云々されている中で五〇年前というものが衝撃的であり、目を引いた。コラム曰く、円の総合的な実力が五〇年ぶりの低水準に迫ってきた。二〇一一年十二月二十日の国際決済銀行(BIS)発表によれば、同日の実効為替レートが一〇年を一〇〇として六八・〇七となり、一九七二年に近づいた。
—中略— 実行為替レートはさまざまの国の通貨の価値を、物価変動を考慮し計算した数値で高いほど海外製品を割安に購入できることを示す。BISによる二〇一二年十二月度の数値(六八・〇七)は統計数値のある九四年以降で最低であった一五年六月に匹敵する(九三年以前は日銀の推計)。円が最も強かつた

のは九五年(一五〇で一〇一〇年と対比して五〇%購買力が高い)と、著者の試算では、二一年十二月が六八・〇七であれば、当該期の購買力は九五年時のそれに比べて四五・二八%しかないことになるのだが…。下がっているのは物価上昇率の内外差を為替レートの変動で吸収できていないためだ。本来物価が上がると購買力が下がるため、通貨の価値は低下する。逆に物価が安定していれば通貨の価値は保たれる。九五年から足元までの日本の消費者物価指数(CPI、総合)の伸びは四%なのに對しアメリカでは八四%に達した。物価が上がらない日本の円の価値は上がりそれが名目の円相場に反映されるはずだが、金利差等から實際は一月上旬に五年ぶ

続くもの。一九七三年先進国で採用、一九七六年一月IMF承認に移行しつつある頃となる。
著者の業界経験によれば、当初(一九七六年)の一ドルは二四〇円ほどであり、それからしばらくはもみ合う円相場であったが、その六年ほど後には一八〇円対ドルとなり、当時の経営者は顔色を変え、『弱い円による飼料の高騰』を憂いておられた。
ちなみに、固定相場で一ドル三六〇円であった。著者の若かりし頃には『舶来モノ』という言葉が大いに力を持っていた。弱い円ではアメリカ・歐州の製品はべらぼうな価格であり、高額の花とされていた時代である。そうした時代を経てみれば、一一六円対ドルで、円の力が五〇年前に戻った、と言われるのも『頭はついて行くものの、肌感覚がついていかない』のが実感である。

昨今『安い円』についての悲観的な見解がマスコミで喧伝されることが多い。ビッグマック指数で見て、アメリカや欧州通貨に対比して円が安いことは確かである。それによって輸入資源(物質)が割高となり、わが国の生産に対するハンディ

キヤップになることは著者も憂う。だから、所得を倍にする方針はうなずける。ただし、物価上昇ペースでなければ、家計は現状より大変になることは自明である。アメリカでは(欧州でも然り)、異常なヘリコプターマネーのバラマキにより、コモディティ(一般消費品)物価がものによつて昨年対比三〇%近くも上昇していると、昨日のニュース(BSテレ東プラス10)で紹介されていた(加えてコロナ禍での物流スタッフで、欠品ナシの一位であり、貧困者の絶対数をアメリカと日本で対比すれば前者でおよそ〇・三八に對しわが国のそれは約〇・三三程度とアメリカが先進国中では断トツの一位であり、貧困者の絶対数はわが国をはるかにしのいでいることは報道ニュース以外でも確認できる。

一般報道で、わが国が他国に比べて一段と遅れているかのごとく喧伝され、ついその力に圧倒されてしまうが、冷静に考えると「果たして、数値は実感どおりほど一致しているのだろう?」と考え込んでしまう。
現状、一〇〇円均一ショッピングセンターでは厳しいハーフルと並んで、半面、国内製品の輸出には厳しいハーフルとなることも事実である。

ことアメリカの内情をインターネットに拠るしかないものの、所得格差の指標であるジニ係数をアメリカと日本で対比すれば前者でおよそ〇・三八に對しわが国のそれは約〇・三三程度とアメリカが先進国中では断トツの一位であり、貧困者の絶対数はわが国をはるかにしのいでいることは報道ニュース以外でも確認できる。

近年アメリカ事情はもっぱらTVニュース報道やインターネットに拠るしかないものの、所得格差の指標であるジニ係数をアメリカと日本で対比すれば前者でおよそ〇・三八に對しわが国のそれは約〇・三三程度とアメリカが先進国中では断トツの一位であり、貧困者の絶対数はわが国をはるかにしのいでいることは報道ニュース以外でも確認できる。

日本では、米国が世界の輸出先として海外に知られている。これだけ質が高いモノが安価で買えるなら、本米なら円相場はもつと高く当然であろう、とは感じる。日経の解説にあるように円が対外からの輸入への貢献は大変なる深刻な問題である。

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

り安値となる一ドル一六円台まで下落、足元でも一一四円台と一年前より一〇円安い水準に沈む。物価指数によると牛肉は一〇年前に比べ二・四倍に急騰。小麦は六六%上昇する等身近な商品の価格差はイギリス・エコノミックス誌が算出するビッグマック指数でも明らかだ。二一年七月時点での購買力は九五年時のそれに比べて四五・二八%しかないことになるのだが…。下がっているのは物価上昇率の内外差を為替レートの変動で吸収できていないためだ。本来物価が上がると購買力が下がるため、通貨の価値は低下する。逆に物価が安定していれば通貨の価値は保たれる。九五年から足元までの日本の消費者物価指数(CPI、総合)の伸びは四%なのに對しアメリカでは八四%に達した。物価が上がらない日本の円の価値は上がりそれが名目の円相場に反映されるはずだが、金利差等から實際は一月上旬に五年ぶ

り安値となる一ドル一六円台まで下落、足元でも一一四円台と一年前より一〇円安い水準に沈む。物価指数によると牛肉は一〇年前に比べ二・四倍に急騰。小麦は六六%上昇する等身近な商品の価格差はイギリス・エコノミックス誌が算出するビッグマック指数でも明らかだ。二一年七月時点での購買力は九五年時のそれに比べて四五・二八%しかないことになるのだが…。下がっているのは物価上昇率の内外差を為替レートの変動で吸収できていないためだ。本来物価が上がると購買力が下がるため、通貨の価値は低下する。逆に物価が安定していれば通貨の価値は保たれる。九五年から足元までの日本の消費者物価指数(CPI、総合)の伸びは四%なのに對しアメリカでは八四%に達した。物価が上がらない日本の円の価値は上がりそれが名目の円相場に反映されるはずだが、金利差等から實際は一月上旬に五年ぶ

り安値となる一ドル一六円台まで下落、足元でも一一四円台と一年前より一〇円安い水準に沈む。物価指数によると牛肉は一〇年前に比べ二・四倍に急騰。小麦は六六%上昇する等身近な商品の価格差はイギリス・エコノミックス誌が算出するビッグマック指数でも明らかだ。二一年七月時点での購買力は九五年時のそれに比べて四五・二八%しかないことになるのだが…。下がっているのは物価上昇率の内外差を為替レートの変動で吸収できていないためだ。本来物価が上がると購買力が下がるため、通貨の価値は低下する。逆に物価が安定していれば通貨の価値は保たれる。九五年から足元までの日本の消費者物価指数(CPI、総合)の伸びは四%なのに對しアメリカでは八四%に達した。物価が上がらない日本の円の価値は上がりそれが名目の円相場に反映されるはずだが、金利差等から實際は一月上旬に五年ぶ